大丈夫よ！お母さん！

vol.26

教育コーディネーター　中西美沙子

（今回のテーマ）

手作りは、心づくし、人づくり

寒い季節になると、子どもの頃に母が編んでくれた手袋を思い出します。そのお気に入りの手袋は、いつの間にかどこかにいってしまいました。でもこの時期になると、ふと思い出すのです。毛糸はとても大切なものでした。母は父のセーターを解き、子どもたちの手袋やマフラーを魔法のように紡ぎました。

現代の私たちは「大量消費」を生きています。そのせいか、物に対して「ぬくもり」という人間的な感覚を抱くことが薄くなっています。でも人は本能のように「ぬくもり」を求めます。その端的な表れが「手作り」と、それへの憧れではないでしょうか。

手で編む。手で土を捏（こ）ねる。手で布を織る。機械製品とは違った世界がそこにはあります。「手作り」は、その人の手の感触が残ったもの。「思いを手渡す」という言葉に言い換えてもよいでしょう。

民芸で名高い柳宗悦は、名もない職人が持っている「手仕事の美」を謳（うた）いました。褒められるものを作りたいという邪心がないところに、人を心地よくする物が生まれる、物づくりと心が一体となって燃焼する、そこに本物の「美」が表れる。それが柳の求めた世界です。時代の変化でしょうか、そのような職人や作家は少なくなっています。

柳の考えた世界とは少し違いますが、別な形で「思いを手渡す」ことができることもあります。

「手作り」という言葉を、この頃よく聞きます。自分の思いで何かを表現することが手作りですが、なぜそれが「ブーム」になるのでしょうか。

友人のジャーナリストが面白い話を残していきました。「近頃、マイカップや自分のために、とっておきの器を求める人が増えている」と。「小学生の娘と毎朝、お気に入りの湯飲みでお茶を飲むのですよ」

勝ち負けが優先する時代を、少しでも慰めるものを、人は探しているのだと彼の話を聞きながら思いました。ささやかであるが「自分だけの器」を手にすることで、今を信じようとする人のけなげな姿を見る思いでした。

手仕事の物を持ち寄って、小さな人の輪を作る。その物に興味を持った人たちが、その場所に集うという形から見えるものは、人と人との触れ合いです。

この触れ合いは、今の日本が失くしたものです。浜松の街も、個性のある商店が並び人の往来も楽しげでした。花屋さん、パン屋さん、喫茶店、昔風なキッチン、画廊、映画館などの通りが、「一つの家族」のようにありました。店主とお客さんとの間に「安心の声」が流れていました。今はどこか寒々とした風が渡っているようです。このような世界にあらがうように、「手作り」という人間的なものが求められているのかも知れません。

人は寄り添いながら生きています。そのようにしないと、つらくなるからです。私も手作りフェアなどで楽しい時間を過ごすことがあります。心惹かれるものは、技術が優れたものだけではない。丁寧に心を織るように作られた物のことです。作った人の思いと品性が、そこにはあります。

亡くなった母は、手先のことが好きでした。古布の藍染めでつくったコースター。袋類。パッチワーク。亡くなる直前まで編んでいた孫の靴下。そのどれもが、母の温かな手が作り上げたものです。とうとう完成することのなかった緑色の毛糸の靴下。それを見るにつけ、「手作り」は「人作り」だと思えるのです。

Profile

教育コーディネーター

中西美沙子

静岡大学客員教授。文章教室「スコーレ」画廊「キューブブルー」などを主宰。文章教室は書き方を教えるだけではなく、生き方や考える視野を学ぶところです。

問 tel 053-456-3770

中西美沙子　検索

ピアニシモでね

中西美沙子 著

著書の「ピアニシモでね」（東京書籍）は、中日新聞に連載された人気コラム「つかまえて！こころ」をまとめたもの。同著には、親子の問題もいろいろ描かれています。（税込1,500円）

※お求めは浜松市内の谷島屋で。